

祭光

イースター礼拝説教

復活の主が分かる時

エレミヤ書 四九章一二〜一三節
ルカによる福音書 二四章一三〜三五節

牧師 高橋 和人

753号

2024年3・4月
日本基督教団
田園調布教会
伝道部発行

〒145-0071
東京都大田区田園調布
3-34-18
電話 03-3721-2811
FAX 03-3721-2814
<https://den-church.jp/>

イースター、主イエスの御復活を祝う日が与えられました。この主の復活の日は、主日と呼ばれ毎日曜日のことも指します。日曜日を主の復活の日として、その日の礼拝を主日礼拝として守ってきました。それは信仰生活の基本である日曜日の礼拝が信仰者の生涯全体を形作っていることを示します。

主の復活の日の礼拝を守って信仰に生きていくのは、主イエスがわたしたちに寄り添い伴ってくださっているという恵みによるものです。今日の聖書の箇所は見事にそれを描きだしています。このエマオへの道の物語は、かつてのことではなく、今を生きる信仰者の姿に重なるものです。この話はルカによる福音書だけに記されていますが、特にルカの属する教会で大切に伝えられたものだと考えられます。

ここで二人の弟子たちがエマオという村に

向かっています。エルサレムを離れて帰るところでしょう。彼らの抱いていた主イエスに対する期待は主イエスが十字架に死なれたことによって外れてしまっています。打ちひしがれています。愛する先生であつたに違いありません。自分たちも従うには様々なものを捨てねばなりません。愛する者と、自分の夢を失うその喪失は大きいのです。

これは一キロほどの道になります。三時間ほどでしょうか。彼らは話し論じ合っています。意見が違っているのでしょうか、あるいはああすれば、こうしていたらと語っていたかも知れません。暗い顔で振り返り、これまでをたどっているのでしょうか。

そこに、イエス御自身が近づいて来て、一緒に歩き始められます。福音書は「二人の目は遮られていて、イエスだとは分からなかった。」と細かに語ります。主イエスは、「歩き

ながら、やり取りしているその話は何のことですか」と聞かれます。その一人のクレオパが答えます。「エルサレムに滞在しているながら、この数日そこで起こったことを、あなただけはご存じなかったのですか。」と。そして二人はナザレのイエスについて「この方は、神と民全体の前で、行いにも言葉にも力のある預言者でした。それなのに、わたしたちの祭司長たちや議員たちは、死刑にするため引き渡して、十字架につけてしまったのです。わたしたちは、あの方こそイスラエルを解放してくださると望みをかけていました。」とその人となり、十字架のいきさつ、自分たちが期待していたことを語ります。

しかし、さらに十字架の死の三日目の今朝信じられないことが起こります。「ところが、仲間の婦人たちがわたしたちを驚かせました。婦人たちは朝早く墓へ行きましたが、遺体を見つげずに戻って来ました。そして、天使たちが現れ、『イエスは生きておられる』と告げたと言うのです。」と墓に行つた婦人たちに天使が「イエスは生きておられる」と告げたのです。

そして、見に行つた仲間たちは主イエスは見当たらなかったことを報告したことを教えるのです。

これを聞いて主イエスは「ああ、物分かりが悪く、心が鈍く預言者たちの言つたことすべてを信じられない者たち」と呼びます。「物分かりの悪い」は、ガラテヤの信徒への手紙三章一節には「ああ、物分かりの悪いガラテヤの人たち、だれがあなたがたを惑わしたのか。目の前に、イエス・キリストが十字架につけられた姿ではつきり示されたではな